慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	『玉造物語』翻刻・校異・解題(下)
Sub Title	
Author	石川, 透(Ishikawa, Toru)
Publisher	慶應義塾大学附属研究所斯道文庫
Publication year	1991
Jtitle	斯道文庫論集 (Bulletin of the Shidô Bunko Institute). No.26 (1991.) ,p.403- 438
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	資料紹介
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00106199-00000026-0403

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

『玉造物語』翻刻・校異・解題（下）

石川　透

たまつくり物語　九　（題簽）

みとり子　十二

みどりこは、天のなしたる、こゝろのまゝにて、なにのわろき、おもひもなきを、おふしたてぬる、かぞいろのわざ、見おぼへて、よくも、あしくも、なりにたり、またその、をきて、たゆみぬれば、よからぬこと、しそめて、くせてふ物になりて、えもわすれぬなめり、いろ〳〵しき事は、（1オ）いはす、まいて、なし、見せめやはと、在五のこだま、とぼそ、とぢて、よせたてまつらず、めのとにも、あながちに、ふくめて、いひも、しもせさせざりけり、むつきにもなれば、人のする見て、ひなあそびせんといふめる、とゝのへ、あたへて、はへ〳〵しくは、なせそ、これは、女のおとこもち、子ちも、うちとゝのへ、かどでせぬことを、し（1ウ）れとて、むまやどのおほ君の、みむすめみやの、なぐさめごとに、はじめさせたまふとぞきく、いとしめやかに、とりしたゝめて、見せて、この子の手まさぐり、はやりかなる、そは、きたなし、とかく、いくたびも、おしへ

なをして、見をりて、ゆるさゞれば、ひるにもなれば、はやつき〳〵しう、ひきつくろふ、見よや、めのと、物（2オ）のをしへこそ、あだならね、このひこひゐな、など、とのにすへて、とぼそのとべ、ゐていだし、うちへ、ゐてかへしするは、おとこはほかにゐで、おほやけの、みことまじはりするすがたなり、ゆみ、やなぐゐ、むま、ものゝぐ、そなふるは、これみな、おのこのつとめ、さふらふならひを、あらはすなるぞ、めひな、うちむろに、すへ（2ウ）て、とぼそとぢて、とべいだしせぬは、ことおとこに、見えもせじ、見えじとの事ぞ、むし、かしきのてうど、おり、ぬふわざのぐ、そなへさふらふは、これは、ひとのめの、わざなればぞ、こひな、いろのそば、とをざけをきぬるは、母のあながちに、子をなでぬれば、あまへたはれて、子のこゝろ、たゞしかる（3オ）ほどを、わすれやするの、おしへぞや、てふど、なめ物、とり〳〵そなへぬは、ちごのとき、ものたしむに、はぢねば、のち、物くふに、はぢしろひせぬ、むさぼり、はぢがはしからぬ、くせ事あればにぞ、おちご、めちご、ひとつところ、せぬ事どもを、おさあひより、ならはし、男女の道、いとうはぢつけよ、はぢしらはねば、みだれのはづか（3ウ）しみに、名をけがしこそすれ、ひこなの、うち入とて、まれ〳〵に、うちへ入て、心にまかせさせぬは、いもせのみち、みだりならぬや、あめ人、世の人の、さだまれりける、のりある事なり、ひいなたてするに、身をきよめ、つゝしみ、もてするは、このときは、われ、天のおほん身に、なりかはり、まつれば、たて人は、天なり、こののり、さ（4オ）だまり、おはして、わがこゝろにも、まかせぬは、もののことはり、あめつちよりさきに、ありて、天の御こゝろにも、わたくし、し給ひぬること、あたはぬなり、ひいなは、人なり、とにも、かくにも、たてぬる人の、なすまゝに、なりぬべきは、人は、あめの、みてに、つかざれば、かなはぬ、ならひなり、たてびとの、すへをくとき、ひゐな、ころびて、（4ウ）のりを、おかせば、とがひいなとて、いむ事なり、あるじのため、いまはしければ、いみて、ひいなを、水にながしやるは、人、天の御手に、つかざれば、とが人とて、天より、ながしつかはし給ふ、もしゆるして、ながしまさねば、あめも、そのとがを、のがれ、まさぬは、物のことはりには、あめも、まけます、さだまりなり、ひいなの、しきもくは、こ（5オ）の事、のちは、たえぬべしとて、かのみことの、さだめさせ、おはしけるまゝに、かまたりの、おほひまふち君、かきしるして、世にはつたへ、お

はしけるとかや、なれも、子もたらば、よくおしへてよ、

みとり子のなにこゝろなきひなあそひこれや世をふるはしめなるらむ、

此ころこそ、をり〳〵、手ならひも、する（5ウ）を、さとく、ひきながせば、いつしか、物かくことは、ねびやかに、いたひけも、事すぎぬる、さまなれば、又いともかきぬべしや、折にふれて、かくまゝに、はや、うかめて、こゑも、あはれなるやうにぞ、うたふめる、ことかく、ひかんといへば、それは、よからず、がくひとつ、ひさに、ならへとて、こえさせず、ことひくこ（6オ）とにも、こゑのうるはしきは、心こそ、そゞろけだて、これは、人のこゝろ、やはらげとこそ、からの、やまとの、むかし人も、つくりけめ、ほとけもひきたまふ、いろになれとには、あらぬぞ、楽、七つ、八、よくかきなして、ひきよく、しらんといふ、秘曲は、こゝろなく、ならへば、そゞろに、ひきいれぬるなめり、よしや、をの（6ウ）がてたれのとき、人にも、ならひなんとて、教へざりけり、もののこゝろ、心つかざるほどに、ものよめと、ひきさそへば、いなむいろもなし、よきことよと、れつじよでん、よまする、あけくれのわざには、このふみの、心、とき、おしへぬるほか、わざもなかりけり、ふみのかきをく、見ゆるに、まかせ、ことのこ（7オ）とはり、きこゆるに、まかせて、おしへなす事は、ふるなの物いひもあべいけれども、わが身に、そのかたかる事なしてこそ、まことのある事をば、人も、まことにならへ、あともなきことを、むなしきことの葉に、いひきこへば、まことしがほにいふとも、人はまことにはうけぬなるぞ、ならへる人のとがゝ（7ウ）は、あな心くるし、此まきも、むかしの人のことにて、めに見ぬあとは、なにとこの子は、見ならひぬべきや、きくはいつはり、見るはまことの見ならひぞかし、おしへのみゝに、ならふをやめて、なして目に、ならはせんには、しかざらまし、わか身むまれなをらばやと、うちなげくも、ありし、あだしわざの、この子に、（8オ）つたはりなんと、まきの見るめも、いやはづかし、

いにしへをそれはむかしとをよはてやありにしあとのいまなかるらん、

おりぬふわざは、神はあまてるおほんがみ、なし給ひ、人は、きさいのみやも、したまふけるとぞ、此ころは、人のこゝろ、くもにのりて、びはことの、いとのみ、てなれて、（8ウ）はりのいとの、なをくゆくをしらず、ふえたけのねの、よしあしは、

ふきならせども、はたものの、をとのすめる、にごれるは、聞てもしらず、きぬたちぬはゞ、わらはめ、なさせそ、せめて、そなりと、われなしもしてこそ、おしへめ、かくぬひゆくを、見なれて、よくぬふなめり、そのはりの、ゆきこそ、よからね、まて（9オ）のあいだ、ちかきは、ころもに、ふしこそたて、たぶさの、ちぶささがりぬれば、はりの道、わきゆきすなる、

あはれわかおりぬふわさのはしたをもふみのあとにておしへてもかな、

たれこめたる、かたはらに、なにの事とは、なうたちけり、そらだちは、せぬ事なり、いろこのみは、こひするとて、心よ（9ウ）せすなり、みちしりは、こゝろうかれぬとて、そしる、まんところには、うつけけり、みやづかへやはせん、人のしうとは、かくては、いかゞおさめん、なれよ、かゝらば、身をいかゞはせむ、（10オ）

〔玉つくり物語　十〕（題簽欠）

月のみやこ　十三

おきのうは風、をとづれそめつる、月もくれて、にしの空、ほそう、かすかに、ゐでそめけるも、こよひ〳〵に影まさりて、正覚とりし、みこゝろの、かたちなしたるは、ゆびをるとしもなき、こよひならめと、なかめをりつゝ、目はそらに、ゆびは琴に、かき（1オ）ならしたるに、みどりのきぬの、いとなよらかなる、女わらはの、まだ、めもなれぬ花の、かゝやきにほふ、もてきて、此はなうちかざせといふ、あやしとしる〳〵、かざしもはてぬに、くものかけはし、うちわたりて、てりかゝやく、しろかねのかゞみ、ちさとの、はてもしらさる、おもてになん行つきけり、からうするけ（1ウ）もなく、うちに入て見れば、ひさかたのあめ、あらかねのつち、世界にたがはざるが、みなてるましろのこがねの、うるはしく、すきとをりぬるは、わがすむかたも、てにとるばかりに見ゆめる、こゝにも、うみぞありける、あをうしろく、むかひのきはもなし、此海しほみちくれは、我かたのしほもさすめり、ひか（2オ）たの、いでくるもおなし、すいしやう、さむご、しろかね、こかね、又めなう、こはく、うちまぜて、とのづくりせし、いくはくなるらん、うちつくに、ちさとゝ聞しも、ものゝかずかは、たまのくるま、とゞろきわたり、内裏にのほりまふて見るに、玉をいとにくりて、めの見るきはをはなれたる、あやおりつけて、

打きたる、おとこ、おとめの、はかり（2ウ）しるほとはつきて、おなじかほのこびたる、いはゞおろかなり、すめろぎは、もゝのつかさのさなごに、たまのうてな、いくゑの上におはしける、これなん、月よみの太神とまふすにやとおもふるに、御みきり、御ひたり、いくなみとなく、有識めける公卿の、おはしける、やゝ、いかなる人たちにやと、とへば、こは、みな、からも、（3オ）やまとも、かしこかる、ひぢりなる、人〳〵にこそあめれ、孔子と聞え給ふは、みぎりの一のなみの第一の人、孟子ときこえおはするは、二のなみの第一の人、顔回は第二の人、老子ともふせしは、ひだりの一のなみの第一の人、三皇ともふしたてまつるは、そのきは、真人にておはせば、此みやこの外に、都こ（3ウ）としきたてゝこそ、おはせ、あそびきませる宮はあれども、ことみやなり、かの、むまやとのおほ君と、もふしたてまつるは、いかにや、かのきみは、此さかひの人には、おはしまさず、これも、あそびきませる院こそあなれ、かゝる、ひぢりたちは、みな此みやこに、あつまりもふきて、あめかしたの、まつりごと、いつくしみおさめ、て（4オ）りおこなひてたのしひ、ことぶきおはすなめるよ、御前のふたいには、三千の舞妓ゐながれて、いとたけの、みゝのよく聞ほとにあらずしも、かなつる、いはんかたなし、吒天のみや、おがみまひらせよと、おほせごとあれは、はるかなるうしろの宮、百のうてなをへて、行たりける、これはなを玉のゐらかたかく、みやばしら、ふと（4ウ）しきたてゝ、あてなるに、はたちばかりの、女みことにて、おはしますが、おほんかたち、ひかりをつくし、にほひをあつめたる、よく見かたし、かずしらぬ、つかさおとめの、ちえもゝえに、たてまつりたるみまへに、しろききつねのおはすは、いかなる事にかと、とへは、此きみのみたまにてこそ、わたらせ給へ、狐王ぼさちとは、聞たて（5オ）まつらずや、このみやこそ、あめがしたの、とみ、ことぶく事、つかさどりおはすなれ、妓芸のみや、おがませよと、おほせあり、まで行て、おがみたてまつれば、院もさきの宮に、たかはず、神のみすかたも、またをとる御事なし、いとうつくしき、おとめ君にてぞ、わたらせ給ふ、やまと、もろこしの、げいのう、たえたる、人〳〵、みな〳〵つどひ（5ウ）おはす、此院こそ、げいのう才覚の事、つかさどり給ふなれ、人こゝらゐまする中に、としは、やそちにもや、あるらんと見ゆる、白ひげありけり、せき、ゆゝしうかまへて、おはすが、うちまねくに、たちよれば、われをば、いさしらずやと聞ゆ、さにこそ

と、いらへぬれば、柿本の人まろとは、きかずや、君は、歌よくよめは、たちかへり、此宮にこそ、（6オ）まひらめ、いでや、とひまいらせん、やまと歌のこゝろ、なになるらん、やまと歌は、わがくにの、もとのならはしなり、すがたおもく、けつよく、心ふかみ、ことばあつき、ときは、みくにおさめ給ふに、かしこきおほきみ、つかふまつりに、たゞしきまちきみ、いてで、おさまりひさし、かろきすがた、よはき、けはひ、あさかるおもひ、うすき（6ウ）ことの葉、もてあそびとなるや、おほきみかろく、まち君うすくして、みたれにちかく、おさまりにとをし、いま見るに、在五の君のうた、ひさしく、あめがした、おさめなん、なれの歌は、女にしあれば、かなへるめり、ますらおの歌、つよからぬは、吉ならなくに、君かなかめませし中には、いつれそや、（7オ）

ほの〳〵と明石のうらのあさ霧にしまかくれ行ふねをしそおもふ、

これは、神の代、人の世の歌なり、

あまのうみに月のふねうけかつらかちかけてこく身は月人おとこ、

これなん、此都の風にそ、あなる、又ならべるせきに、在五の君も、いまそかりけり、いつのほどに、こゝには、きましけ（7ウ）む、いな〳〵こゝより、しきしまの道、おこせとて、あまくだりけれは、そのかげの、うつり見ゆるなり、今はこゝには、いまさず、のちは、かへりきまさんや、身のわざの、きたなさに、とみには、かへらじ、二千歳、下界にあそびてのちこそ、ゆるされ、まひらせて、かへりきましなん、もろこし人の、見ゆめるは、たれにてやあるらん、中の（8オ）なみの、上のせきに、おはせる、ふたりは、り太白、としみ、つぎのせきは、はくらく天、かんたいし、なりけり、かん退しの、物おもふけなるは、はじめひがみければなりし、のちに、心かへの、よかりけれは、ゆるされきたるが、なをその事の、くやしさにこそあなれ、そのよは、ものかく、ゑかく、いとたけ、ゐる、のる、いくばくのわざ人、（8ウ）みなおはすに、名もとふかぎりやはある、玉つきあげし山は、丸くうるはし、我くにのふじのやまと見たるは、なに山ぞや、これは、あめの、ひとつの山を、くにゝうつしやりて、人の心のかたとなす、ふじの山なりけり、山のふもとに、雪なる、おしか、やあたの、たけも、ゆらにたてるが、つのは、とをあまり、（9オ）七えだの、たまなす、光なす、こは何そ、むまやどの、すめらみこの、たぐひなき、

まひとなる、しるしに、まひらせ給ふ、くにの、みつき、ゆるされて、たみ人、みなみめくみに、よろこび、さかゆるこゝろの、ゐき、月のみやこのひかりましぬる、きりのみもとの、けものなり、すそのゝ、玉の百いろ、ちくさの花さく（9ウ）野辺に、たけ五あたのきゝすのましろの、しもけの、やゑは、玉はの、とりは、なにぞや、こも、かのみことの、まつりごとの、しるしなりけり、あめがしたの、みなせご、ひとりと、やもお、やもめ、やしなひ給ひ、やみ、くるしむ人たみの、すべなき、くすしまして、世すくひ給へば、くにのえびす、みな道しりて、四の（10オ）うみ、なみ風なく、世〻おさめ給ふ、てほんとなして、月のめくれる道たゞす、みたすけなす、ほうわうの、もとのとりなりけり、よく、かのみあと、したひまさば、あめのみこゝろやすく、くにおさまりなん、山のたをりの水うみに、あなる、たつまの、せに、まろきかたある、いつそぢあまり、五つのほしの、みぎりめぐりて、（10ウ）てれるは、何なるや、こは、そのから国の、ふきといひし、まひとの君、八のかけし、むそぢあまり、四のかけし、もとなり、こや、人の、あめのことはり、しるためしなりけり、しらたまの、おほかめの、せに、けたなるかたに、よそぢあまり、五つのほしの、ひだりめぐりて、かゝやくは、何そ、こはこも、からくにの、夏の禹と、いひし、（11オ）ひちり人の君、かなへつくり、みかとのしるしののり、つくりしためしなりけり、からにも、やまとにもあれ、みなかゝらは、あめの上やすく、天かしたたのしかりなん、いでや、むまやどの、ひつきみこの宮、行ておかみまひらせまし、まふち君、たちて、いで行ます、百丈の玉のきさはし、ふみならし、まふ（11ウ）のぼり見れば、たまたれ、たれて、おくは見えず、いまおはしけるやかは、学問といふはかせ、こは恵慈てふぜんじ、こまの、あさ太子も、おはす、また馬子のおほひまふち君もます、このまふちきみの、たのしまざるけは、君を弑したてまつりしとがの、なをはれぬなりけり、かの君、みわざのきた（12オ）なきなれは、此まふちきみのとが、うすきにこそ、さはあれど、なを、今は鬼の中にそ、おはす、これは、うつれるかげなりけり、のち三千歳ありてこそ、かへりきまさめ、いまもかも、君はあしはらの、中つ国へは、行まさずや、いつことはなく、やまと歌よむなる方には、必ゆき至りあそふにそ、西王母の宮を、見まさん（12ウ）や、さらはとて、まかてゝ、とのにのぼる、かずよむべくもなき、仙のおとめ、仙のおきな、つどひをりて、神丹といふめるくすりをねる、王母は、

みそちばかりして、月のおもて、花のかたちの女房なるが、八いろのたまを、いとくりて、こりようのにしき、おりたる、たちきたり、ころんの山とこそきけ、こゝはもと（13オ）のみやならずや、ころんは、あそびをる方なり、此宮にてこそ、人のやむ、まめ、はからひませ、やむものゝ、をのづから、いえなをるは、こゝより、くもきりのけに、くすりのせて、たびてなり、くはた、へんざくと聞ふるは、あのおきなり、しんのう、くわうていは、おはしまさずや、さればよ、かのひぢりたちは、ふとこと（13ウ）しきたてたる、ことみやここそ、おはすなれ、ぎはく、らいかうも、みなしたかへり、王母見給ひて、青衣して、名におふもゝの、うめるを、とりてたびたり、なめ見れは、したのたえ、心のをよぶさかひかは、それよりなん、くちの香、つねにらにの匂ひすなる、手も今にらにの香ぞする、きこえしかつらの木、いつこにか、さ（14オ）ふらふらん、なを行〳〵見れは、三千丈のかつらあり、玉のいはほの上に、ねざしたり、木はめなうにたり、花はぼたんのごとして、ちえにかさなり、雪のいろに、かゝやく、さる中に、むらさき、あけ、なをみどり、又黄なるいろの、いづこの色のにほひとはなう、匂ひてりましる、いはゞことの葉なし、まふち君、（14ウ）

月よみの神のかつらのちる花を秋はまされるひかりといふらむ、

返しをたてまつる、

久かたのかつらなりてふ月をなよはなにならへる名をやなかさむ、

婿娥といふめる、女のありとこそ、聞つれ、真珠をつくねたるやうの、ひきかへるの、玉の花の枝にすめるなり、くすりぬすみし（15オ）奸穢の、にくさのすかたなり、さらばなどこゝにはきてさふらふ、くすりのみたるは、いかゞはせん、げいしやうゐのきよくまふとは、舞妓にあたれる日は、あまつおとめのすがた、ゆるされぬるなめり、うさぎもさふらふなるは、いづこにかくれぬらん、水精のたかどのに、八十乙女の、ものたてまつる、弓矢もたるおとこは、こうげいと、いへる人（15ウ）なり、わろきおにの、日の気ぬすみて、八の日をなしもて、月をやき、人のくにをやくにそ、月の精あまくたりて、ゆみゐる人と成れりける、王母に薬をえて、ゐるへかりけらし、はじめのくすりは、婿娥にのまれつ、のちの薬にて、羽をなして、日をぞゐける、そのいさをしすぐれたりけれは、此みやこの長者にて、つね（16オ）は仙客のすかたなるを、をこたりて、く

すりぬすまれつれは、そのつみもて、身のかげうさぎなり、たかどのゝ下へ行見れば、しろきうさぎのかげぞ見えける、唐帝こゝに入ませし事は、かしこきにしも、まゐて、ひぢりとだにも、きかなくに、いさをしか、さきか、いかなれば、わたらせおはしけるや、何のたすけぞ、（16ウ）かゝるらん、ひぢりも、かしこきも、そは神仙をたのしむねがひなし、されは、こむ事よしなし、かの君は、こゝの能楽の王にて、いまそかりけり、もろこしの風月の道、おこせとて、あまくたりし、その事なふさ〳〵に、とげをはりしいさをし、すぐれにたり、たゞ色このむきたなさはあれど、孝行の事も、ほねに入ておも（17オ）ふも、すてがたし、つねは孝経をのみ、たとび見て、これにてつくのひぬ、かつ道徳経うやまひ、神仙の雲にうちのる心あり、はたほとけの道をも、あがまへ、ほとけのみやこも、見るばかりなり、仁愛あつう、人をせめます心なきなめり、されば、あまのはごろものきよく、人間につたえよと、仙客のたよりに入こ（17ウ）し人ぞかし、よしさらば、わらはが、きたなき身の、なにしにか、きましつらん、君ももと、こゝの人になん、こゝろ人間をたのしまず、風月のきよく、神仙にひきまじはりぬ、雲ふみしたききよきおもひと、うるはしきかたちの、たえてあやしき、人間にあまれる、そのいろにあはせける、あやしきこゝろさまの、こゝにいたるへきにあた（18オ）りぬるを、ひきよくの、をのづから、月のみやこ、ひゞかして、おとめ、うかれて、いざなへり、こゝの人の、ことぶきは、かぎれるほとのあるにや、億〳〵兆〳〵、かずはしるものなきにこそ、はじめあるなるものゝ、をはりなきは、さふらはじ、げにをはりこそあらめ、たれはたしれるかは、（18ウ）

玉つくり物語　十一　（題簽）

やうきひ　十四

あまつおとめの、もてきて、うちかざせし、世に見ぬ花は、いま見れば、月のかつらのはなにざりけり、かの乙女の袖ひきかへすが、ほうらい宮、見まさんや、いでや、見さふらひなむと、うちかたらひ行に、いづこともなき、あまのうみ、うちわたりて、なが（1オ）れくれば、わかしほさす海に、いにけり、こがねの山の、いく百丈ともなき、岩ほそびえ、見もせぬ、から木、からくさ、はへしげり、いくえもしらぬ、いろ〳〵のくも、峰をつゝみ、ふもとをめぐり、はれみくもりみするを、みどり

の霞、又たちそひて、水のくま、たゞよひ、瀧のながれに、あひおちする、ひま（1ウ）〳〵に、こがねのむね、ゐらか、ならびて、おかしきが、楊妃殿といふ、格額こそ、見ゆめれ、こは、かの海棠のねむれる人の、すみかなるらんと、たゝずみ見れば、天のみつかひの、やごとなさよと、乙女子とも、たちさはげば、玉妃も、とこをりて、むかへます、聞つたへてし、小野小町げざんこそ、希有なめれ、此わたり（2オ）仙人、まろふともふけとて、名もしらず、あぢはひもしらざる、さかな、このみ、さゝげくめるあつまるさけもしらぬか、香ににほふ花の露、ためならし、かもしけん、なをまだくちびるふれなくに、はやしたにあまれることの、何とか、ときも、かたりも、つくしなん、唐ていに、なれまひらせて、ふきつたへてし、ふえたけの、（2ウ）こゑすみわたれば、春のうぐひす、さへづりいづる、今は時かはといへば、こゝは、とこよの名にしるからずや、あれも、琴ひきねあはするに、楽もやゝはてければ、過こしものかたり、うちはじめて、しらぬからくに、たつのみやこ、のこと、みゝおどろかして、めづらかなる、何のゆへにかかゝる人の、太平の御世かたぶ（3オ）け、おはしけん、かの唐帝の、しること、めくむこと、けなる、きみにて、やまとのくに、かたむけなんと、こゝろのねざしふかく、人のたけく、はかる事は、神もをよばぬきはの、あなるとて、あれ行て、くせごと、はらへとて、あまてらす日の都より、おほせごと、そむきがたきになん、すゞろにゆきて、あらぬ（3ウ）ありさま、人間のふでのあとこそ、おもなけれ、かのきみ、いたりいたれる、かしこきこゝろありて、玉女のいろ、入まさずは、何とかし給ふべき、それは、あがちからのをよぶかぎりに、さふらはす、しかはあれど、しき島のやまとのくには、もろこしより、いく度うかゞひつる心あめれども、とげざるや、そ（4オ）のことは、あまつ神、くにつ神の、まさんかぎりの、ちかひなりけり、又この国のやつこらが、あまつひつき、うかゞひてし事の、あなるも、とげざりしも、神風やいせの、三つのみやばしら、たゝんかぎり、すみの江の、松のみさほの、さかえんかぎり、八百よろづの神の、みこゝろすめらんかぎり成べし、このことし（4ウ）らぬから人、やまと人、をよびなき事、思ひそめてぞ、をのがこゝろの、をのが身をかきけちぬるも、いとかなし、わが国の神〳〵は、いづれか、あてに、おはしますらん、うちの宮は、やたのみかゞみ、あまてるおほん神の、ものしります、みたまの、天のことしります神なり、とのみやは、月よみの神、

日の神のひるて（5オ）りかはかすを、よるてりうるほす、つちしる神なり、いそのみやは、みむすめこゝろをだやかにして、日のかみかはかし、月の神うるほす、なりわひを、おさめもて、世にほどこして、人もる神なり、あつたのとのみやは、とつかの、みつるぎ、あまてる太神の、いさめる、みたまの、ものゝふ、おさむる神なり、内の宮（5ウ）は、みつるぎのたま、みことゝむまれて、神となる神なり、われもこの神の、み魂の、人のくに、たいらげて、此国まもりし、たぐひなり、いつくしまの神は、玉のみすまろの、くにをとまするみたまの、うみに入て、わたづみのむすめとなりて、あらはれいでましたるなり、これあまてらすおほん神の、人いつ（6オ）くしみますみたまの、国のとみしる神なり、すみの江の宮は、あめつちの、ものしることはり、いさめることはり、人いつくしむことはりの、こりあつまりて、いざなぎのみことの、けがれ、はらひをはりませし、きよきみけとろけて、三はしらの神となりたる神なり、うさの宮は、あまてる神のみたま、神功の君の（6ウ）身にやとりいてます、知仁勇のまろかれたる神なり、かしまのみや、かとりの宮は、たけくいさめる神、あしはらの中つ国もるもろ神、いてひく神なり、ふちの山は、あまの中なるへさい天母の、日の中にまして、あまてらす神といはれ、ひかりをわけて月よみの神となり、うみをたゝえて、海の中に、（7オ）山をなして、ちくふしまにまし、山をつみて山の上にうみをなして、ふちのたけにます、わか国のくにはしらなり、いつもの神はつちしる神、三輪の神はくにつくる神なめり、かくはいへと、国にてはくにの神、あかたにてはあかたの神、我すむ方のはすてないて、人のくにもる神に（7ウ）のみつかへまつれは、神とがめにこそあへれ、神のみこゝろは何とかますや、神は信するをもりて、うたかひぬるをすてます、誠になるをこのみ給ふて、いつはるをにくみ、きよきをよろこひたまひて、けかるゝをうれへます、たゝしきにやはらき、よこしまなるにいかり、ことはり（8オ）をうけ、あらさるをつみなへます、おとめたちさはきて、はやむは玉のよもあけになん、いさゝせませとて、ころもてひくに、

ひさかたの月のほとりにうかれなはかへりきてこそ君をたつねめ、

楊妃返し、

いかはかり月のみやこはすむと（8ウ）てもよもきか島をわすれすをとへ、

かへり見つるなこり、雲へたゝりて、月はにしの山の端に、お

とめはしのゝめのそらに、（9オ）

たまつくり物語　十二　（題簽）

姐巳　十五

ひさかたの中なる、みやこにあそび、わだづみの上なる、しまにさそらひし、そのほどをおもへば、十のとをかを、十日ばかりも、すぎやしけんと、おもひたどられしに、きのふのもち月の、たつの宮ゆくより、けふのいざよひに、ならんとする、鳥の（1オ）すにゐるまの、ことにこそあめれ、何よりも、わきて、あやしう、はかりがてなりしは、蓬萊宮に入て、月のみやこの、おほみきたまひてたひけるなかばになん、はたちばかりには、ふたとせ三とせも、ふけにたる、けはひの女房の、まばゆくてれる、かほばせは、こびいくしほにか、そめなし（1ウ）けん、らきにも、たえぬすがたは、ちゞのこゝろうごきつらなりこぼれて、あが女のこゝろも、そゞろけたつが、大真の月のすがたに、あらそひて、いづれをとらんとも、おもひさだめぬなん、もふきたり、八人の青衣に、つまとらせ、わらはべの、おかしげなるに、紫金の盆に、べにさしたる、もゝのおほきさや（2オ）しほてふみのもろこし人の、たづさへぬるばかりなる、五つもらせて、きのふ王母より給ひたり、まろふと、もふけとて、あるじのつぎのとこに、なをりゐて、しらぬからくにのこと、かたりいつるをきけば、湯王は、さしもの、ひぢりなりけれども、こきみの身の、おほきみころして、その天（2ウ）がしたを、君がゆかりにも、ゆづらで、をのが、ものともなしけらしとが、いかなる、あまつみかども、月の都も、たたりやなからん、さはあれど、ひとりの帝を、きりたてまつりて、もゝの王をたすけ、ひとつの氏をたち、よろづのかばねをたてたる、わざのきよく、つゝがなかりしや、みゆる（3オ）し有て、みこ、みむまご、かはる〳〵、ひさしう、あめがした、おさめけれども、さのみは、いかゞ、ゆるしまさん、とがあらば、うかゞはんうたんと、あめのつかさたち、あからめもせず、見くだしまもる物から、紂王の心きたなし、このひまこそあらめ、わらはに行て、くびれとて、くびらせたまひつ、すでに（3ウ）くびりころしなば、かきけちても、かへりくべきを、世ゝの人〳〵、みめよき女は、みなこたまぞ、見よとて、しほうてふ、ひぢりのために、くびられにたりけり、こは名にながれたる、だつき、なめりと、おそろし、いまは、いづこに、おはします

にやと、おもへば、まだいひもいでざるに、此しまの、しか〳〵（4オ）のみやこぞ、わらはがすみかなれといふ、かのみかどの朝には、三人のひぢりのありしには、いかでか、かち給ひにけん、みたりの聖人は、こひぢりなれば、いふにしもたらず、堯舜禹の大聖としもいふとも、かちなんとせば、かたでやは、あるべき、なにのくまにしもたよりてか、かちまし給ふべき、かの聖帝も、（4ウ）いろこのむ心の、なきにしもあらず、わらはが、たよりうるところなり、さはいへど、ひとつふたつ、かたきことこそあらめ、かのおほひぢりのごときは、人のかきりをはかりて、世中のさかひを過て、たえ、たえたるをば、人にあらずとてすてゝ入されは、いかゝはせん、又は、心にはかり、身にふるまへる（5オ）中に、とがめよるべき、とがこそなけれ、とがあらなくには、ちからなし、もしや、なれてむつましかる中とさへ、ならましかば、いかなる、ひぢりも、をかしてん、かゝる、こだまの、何のきよきすぎやうのありてか、此きよらのさかひには、すまふにやと、おもひめぐらせば、玉妃うちゑみて、この君は、いまこそ、（5ウ）こたまには、あなれ、まことのおほん身は、さばせむゐしやの、ぼさちにてこそ、わたらせ給へ、あれ供養したてまつりませとて、めなうの香箱に、こつせたんといふ、香をもり、るりのこうろに、こはくのすみくべ、さんごのうてなにすへて、さしいでつ、もてすゝみて、たきてたてまつりなんとす、さ（6オ）るにても、大悲観音、何のまよひに、妖魅とはなりて、世をみだし、人をくびりまさんと、おもひ給へば、玉妃心にえて、不思議げだつのわざ、人間の、はかりしりたまふべきやは、げにさることこそあれ、さらば、ぼさち、よみと、ならせたまひては、御こゝろいかゞおはすらん、よみとなりては、よみの心あり、ひぢりとなりては、ひ（6ウ）ちのこゝろあるか、さはあれど、仏性のあきらけきこそ、いつもかはらね、それよりぞ、しづみても、又うかびいでぬめる、小町、

なすつみはとくもをそくものかれぬとしる〳〵人のなとまよふらむ、

唐妃、

あまつ空くもりなきめのまも（7オ）るをはふりさけ見れとしらぬかほなる、

殷妃、

ひるは日かり夜るは月よみ照し見てかそふるつみをたれかのかれむ、

今はとて、たきければ、玉妃のたまはゝす、君がさる心にて、なでふ、ぼさち、うけまさん、ぼさち、いかでか、かゝるよみと、なりまさんと、うたがふこゝろのそこひ、(7ウ)のこりて、おぼつかなきに、なをしもよの人〳〵を、しちにあはれむ、だいひのおもひの、うすうして、あはき、こゝろの、ゆくかぎり、ぼさちの、みこゝろに、かなはず、此たときうつはの、世に、たからとするに、こゝろありて、きよくふりすゝきたる心なう、女房なりけりと、うちあなどるおもひに、うや〳〵のぬかづき、心(8オ)にかろひたるけぞ、ありける、かゝるこゝろにては、いかなる摩尼の玉もてさゝくめるも、ほとけは、うけまさず、又神もなをうけぬにぞ、げにさる事こそあれ、こゝろひとつを、あらたむる、きよきほとに、ひきかえて、なをひれふして、たきければ、此けふり、むらさきの、こく、うすう、あけに、みどりに、きに、(8ウ)しろき、こかる、うすかる、もゝちゞかずつきなくに、爐のくちは、わたりわづか、ゆびまたきのべて、わたりなんほどなる中より、けふりのふとさ、十尺ばかりや、あらん、みやの天井は、二丈ばかりもと、見ゆるに、ながさは、三千尺にたちて、にほひ、あめつちに、かほりて、心のゆくへたえにたり、此けむりのうちに、こがね(9オ)の身の御仏、にくの身の、みほとけ、いくらとなう、はかりもなく、ましければ、月のみやこ、ほしのみや、たつのみや、仙のみやこ〳〵よりとて、まとうちくゐの神たち、もふで来つゝ、いとたけの、くさ〳〵さま〳〵供養したてまつり、ふしぬかづきて、なみだこぼるゝも、世にたうとし、あのけふりのうちに、ちゞのたゞむき、おはし(9ウ)ますは、あれこそ、せんず大悲にて、わたらせ給へ、とをあまり、ふたつの、みかほ、ますは、これは、十一面ぼさち、いかれるみかほの、四ついましして、むまの、かふべの、みいたゞきに、いまするは、それこそ、めづ忿怒尊なれ、五色の毛のしゝに、のりたまふは、もんずゝり、にてこそわたらせたまへ、六牙の象にの(10オ)りますは、ふげん大士よ、此大聖尊は、いつも〳〵わたらせたまへるや、さはさふらはず、君きよきこゝろの、香にわすればなり、わらはも、つねには、おがみたてまつらぬよ、よしさはこれも、まことの、おほん身にはあらず、浄土にいまする、みすがたの、けふりにうつりけるなり、此香たきぬれば、いつも、うつらせた(10ウ)まふにや、こゝろし、かなへれはかゝり、かなはざれば、さはあらずかしと、かたらふ、こと葉のすゑに、けむりたちきえければ、聖衆は見えさせたまはず、あめつちの神〳〵は、

みなぬかづき、しそきて、もとのみやこへ、かえり入ます、(11オ)

〔玉つくり物語　十三〕（題簽欠）

ゆめあはせ　十七

ゆめのうきはし、かけてもおもはぬことをも見つるか、めのとめさめね、かくこそ〳〵と、夢ときすれば、几帳のそとに、ゐねをりて、はゝがこゑぞと、うちおどろき、いたいけしたるものごしして、かゝる御ゆめこそうれしうさふらへ、はゝ君こそ、はやも、(1オ)きさいのみやにたゝせ給ひさふらふへけれ、在五の君も、古院の御うまこにて、おはしませば、などや、御くらゐにも、つかせおはしまさゞらんと、よにうれしげに、ゆめあはせしつ、むばたまの夜はまだふかし、をさあひものは、いねのねごきならひよと、たゆみおもひて、はからず、あらぬ事をも、(1ウ)きかせつるか、めのとは、こゝろして、めさめは、いかにつけざりけん、かひなし、なれきけよ、このゆめは、神にかよひて見るには、まことあるなる、さらぬは、みなわがはらのうちの、さま〳〵を、こゝろのゆきかよひて、あらぬさかひをのみ見て、ゆめむすぶなり、まことの人は、とここゝろに、きたなきおもひ(2オ)のなければ、きたなきこと、つたなき、あだしくさ〳〵の、みだり〳〵は、見はせさせおはさぬなり、人はゆめにて、をのがこゝろの、きたなき、おそろしき、しりぬるなり、かくてこゝろの、きよきたなき、しつかにしり、さてなん、身のさかへ、おとろへ、よくたゝしくしりて、はやあらためすれば、わろきも、(2ウ)よきになるにこそ、たとひ、神つげますとも、物のことはり、よくわきまへて、ことはりの、あたれらば、まことゝおもふべし、ことはりならず、うたがひぬべし、おほやけみ子いまさず、なをおほうちに、ちかきほとりの竹のそのふのたね、たえばこそ、在五の君も、さる御事もやとも、うたがひなまし、さらずは、世(3オ)にたえませし、ひぢりみ心にて、うぢ、なにはにも、まさばこそあらめ、このゆめ、さらにことはりにあたらず、人は身のかぎりをしりぬべし、そのかぎりをこえつれば、よきもあしきになりなん、われなにのいさをしありて、かかるくらゐにのぼりなん、在五のきみのことは、ことはりにあたらず、わらはが(3ウ)ことは、かぎりにあたらず、みなあだなる、なれよ、心せよ、かまへて、よくおもほえて、母かなからんあとの、にはのおしへとせよ、かくいひしぞ、おやと子との、なが

きわかれのひとことなり、かくはいへど、などやらん、身もことの外なるつかれ、いまにおぼえぬはだゑかきさぐりぬれば、すゝしのひとへ、うちへたてたる、それよ（4オ）りなをあやし、かほもたげにきけば、みなよくしづまりふせり、しのび〳〵をきもて、ともしひかゝげ、かゞみひきよせ、うちむかへば、うらしまが子は、よそならず、夜もあけ、人も見ば、いかなるこたまきたりて、小町を、みなくひて、のこりゐたるとて、はぢやみん、夜のまにはやもかく、本のまゝ（4ウ）

せきてら　十八

九重のうちは、人てふ人の、すむとすみぬる、かぎりなりけれは、さらば人ならなくに、とどまりなましや、しばらくも、やすらふべきは、関のそなたにこそと、たちいでぬるに、いつしかしづのめの、身とも成けり、よくあよまるゝまゝ（5オ）に、うちたどりて、せき寺にゐにけり、見れば、こゝこそ、一日ふつかの、身はすむべけれ、寺に行て、仏おしおがみ、たゝずみぬるに、法師のまかせつくる、いできて、うばきみ、あやしき、けしきして、いづこよりか、きぬらん、わらはゝ、空王如来の、みもとより、きたりけらし、それは、（5ウ）過去久遠の仏、いづこにかおはしぬらん、こゝもとにこそ、いまそかりけれ、そのほとけのみかたちは、いかに、ひさかたのあめ、たかけれども、なをその上はるかなり、あらかねのつち、あつけれども、いやそのそことをし、にしも、ひんがしも、みぎりひだりの、御手のはてもなく、みん（6オ）なみもきたも、みまへ、御うしろの、かぎりもなし、御身のきよきためし、いけのきたなる、山路の雪も、たとへならず、あかゝるひかりは、あかねさし出る日も、をよびなし、さらば、むなしきそらに、なりたまひけるや、むなしきそらはのりもなし、この御ほとけは、よのなか世のほか、ある（6ウ）とあるなる、御法のみくらの、御身なれは、空にはいかでか、たぐひさふらはん、ことなるうば君にこそ、あの蟬丸か、住あらしたる、わらやの中に、やどりをりて、つねはもうできて、うちものかたらひなん、あさなゆふなのわざは、法師こそはからひなん、いざとて、をし入れぬ、水はたけのよに入て（7オ）のみ、いゐはひさごにもりはむ、見えぬればはむ、見えざれは、いとなみなき、いやきよく、そらになりて、あめつちもおなじこゝろに、うちねふりをる、あやしや、うへぬるこゝろこそなけれ、げにもろこしの、いやしきちまたに、すみし人も、かゝるこゝろにてこそ、よをばおくりけめ、せみまろか、

このい（7ウ）ほにありしも、さこそすみちぎりしこゝろなりけん、まどしきこゝろほと、きよき物は、よにはあらざる、きのみかは、根つくにたのし、あめつちしろしめす、御たのしひは、このはしばかりも、おはしまさじ、あはれかゝるこゝろを、あまつ日月の、御うへに、しろしめしなば、からくにの、つゞみかけし（8オ）御代の君、わかくにの、けふりみませし、みよのすべらきとや、なりたまひなん、又おほきおほひまうちきみ、ゑたまはゞ、おほやけの御師にて、ものおしへたてまつらせたまふきはの、さぞやよからん、大納言中納言なといふ人しらば、上にものもうし、下にものいふや、すめらん、かのがんゑんも、ひぢをまくらに（8ウ）まきて、ひとりが心に、をのづから、あめがしたおさめもて、人しれぬ、ひじりの世を、ひとりや、こゝろに、たのしひけん、かくとはいはぬを、孔子ともふせし、ひぢり、こゝろと心とにのみ、しり給ひて、それとはいはで、そのことを、よそにやいたくほめ、おはしけん、又とをのさかひも、すくひをしへなん、こゝをやほとけも、くにもる（9オ）経とは、のべましけん、よしや、すめろぎの御位も、わが心、ほとけの御身も、わが心なりけり、

とゝむるもとゝまるもたれ戸さしせん心つからやあふさかの関、

こゝろをはとゝむるせきもなかりけりむかしの人にあふさかの関、

道行人、たちやすらひぬるが、なのら（9ウ）ぬものゝ、あがたしれぬる、手ぶり、みやびかならぬ、をとなひ、なよらならぬ、われもものうきは、人にとをかる身とこそなれ、こゝろは、あがたきよく、身はみやこきよし、うたてきは、つれあひせぬなめり、かくてぞ、代々のひぢりの、をよひなきかぎりは、しるかりける、法師わうりやうに、い（10オ）ひもりて、もてきてたぶ、大かたは、こつがひびとにあとふ、三日四日も、うちすぎぬれど、うへもおもほえず、仙人にやなりつらん、なに仙人うらやまん、身はみまかりなんときに、身まかりこそせめ、心のつねなるや、

此間闕文

みやこより、人〳〵聞つたへきたりて、（10ウ）つく〳〵とうち見、うち聞て、うば君は、小町のきみの、風声のしたりや、その人にはあらず、つねならぬ人にこそとて、よね、ころも、あまたをくる、みなこつがひにたびつ、なをおほかれば、法師に、まいらせぬる、その人にたりと聞て、むすめも、めのと

も、まうできて、うせたまひし人の、風声したるは（11オ）とて、見れども、その人にてあらばこそ、なみたのみ、あめとふらして、似たることの、なつかしさにとて、きぬゝぎ、でふどおきて、かへりつ、かくすれども、かなしきおもひもなし、身まかりたる人の、このよにある、子どもうまごどもを見るや、わがこゝろならん、あれはわがこ、わがなれしわらはめとはしれども、なごり（11ウ）おしさの、かなしみもなし、

我子そと見れとあはれのとまらぬは身こそこゝろをあらたむるらめ、

心こそあらためけめなこの世から此よにあらぬ身とをなりしは、

くもの上にも、小町ににたるありと、きこしめしぬる、それか（12オ）あらぬか、見てまいりてよと、大納言して、御歌たまはりけり、御返し奉りねと、せめたまふ、げにや、さ返し奉らさらば、君をやわすれまいらするにならん、御歌に、

くもの上はありしむかしにかはらねと見し玉たれのうちやゆかしき、

歌はよまざりけれど、御返し（12ウ）たてまつらずしもあらば、おそれこそさふらふべけれ、ぞもじ一もじこそ、御返しなれといへば、勅使こゝろえて、

雲のうへはありしむかしにかはらねと見したまたれのうちそゆかしき、

かくやといふ、しかりといらへまひらせければ、さればこそといひて、かへり給ふ、かへるやとき、行やおそきと、たち（13オ）いでゝ、せたのからはし、きゝもてゆく（13ウ）

玉つくり物語　十四　（題簽）

あかたのおしえ　十九

たきゞもつき、おはしまし、けふりもたえ給へば、こがねのひつき、ひきひらくに、しろき御ほね、めなうに、似たる玉、あかき御しゝむら、さんごのすきとをる、みどりの御かみ、むば玉のくろき、これを舎利とは、そのくにの人の、ことのはなり、あい（1オ）く王と申せし大王、いしのとう、八万四千つくりて、一つのとうに、一りうおさめ、まひらせ、おにかりて、なんせんぶしうのうちに、たえたまふところゞに、たてたてまつれと、つかはしける、このあいわうざん、その一つにておはします、もろこしの、いわうざんてふ、それもこれなり、うかやふ

きあはせずのみこと（1ウ）の、御ときより、わたらせたまへば、そのありはじめし、しる人もなし、志賀に、みやこうつしたまひし御時に、しらひげの明神、たくせんしおはしまして、もうでゝおがみまいらせん、御こし此山の、やまのたをりに、とゞまりおはして、そこより、みてぐら、かんなぎが、かたにかゝらせ給ふ、三百あよみはがり（2オ）より、みづからおどりて、此とうの地りんに、かゝります、これより人、ことをそしれる、山のありたにかならすこそ、としに一たび、打むれてまいりぬれ、うばもまいらん、道のべのちりかきしける、くさまくらは、たとへもなき、きよきかぎり、をかしきまゝに、このころ、しはふに、やすらひをる、人あやしめとへば、（2ウ）しか〳〵、このしづのめあはれがりて、いできて、いたわりぬ、ありふしまゝに、をのがこゝろはなし、あるじのこゝろのみ、さとのあがめの上人、まてきて、うばはいつのよまでか、ながらへむとすらん、さらにわらひてをる、なをやみもせで、ふたたびみたびとふ、わかきさへあらん、いまやのちや、かぎり、たれ（3オ）かは、しりぬ、さらばなどしも、のちの世の、かてたくはへざる、時にはとき、日には日、ほとけの道、つとめまつるのみ、きくに、仏のみなも、となへず、見るにざぜんもせず、われなきはほとけのみ名、心なきは坐禅なり、仏の御名を、となふるは、わが心に、まずよびいだして、これをとゞめ、わが身に、そのきわ（3ウ）あり、よびつらねて、そとなれとなり、こゝろの仏、かくれたまはず、身のほとけ、やみまさずは、となふるみなの、人のみゝ、かまびすしくもせんや、ざぜんつとむるは、はなれゆくこゝろ、とりとめぬる、みのりなりけり、心はなれずは、何のひざのつかれに、ことなるかほなして、人のめ、けがらすに、なさめや、かいは、つ（4オ）みやめぬるみのり、つみつくらねば、ふすも、をくるも、かい、はんにやは、さとりさとらするのみのり、こゝろの月、くもらねば、ねむるも、さむるも、はんにやなり、をとこはいでゝ、田うちくさぎりし、女は入て、をりぬいせん、われなくこゝろなき、など人にこびする、女は人にしたがふとこそ、むかしの人もいへ、三従（4ウ）てふこと、をさなくしては、父母にしたがひ、さかりにしては、夫にしたがひ、老ては、子になんしたがふ、さればこそ、われしたがひさふらへ、をさなき時は、よくかぞいろに、したがひまいらせて、わがこゝろとて、さむらはず、さかりにしては、よくいもせに、したがひて、くねる思ひ、さらになかりき、老ては、子にしたがひて、わ（5オ）がまゝし

ぬる、わざもなし、女のみち、まもる、このあまりやはあるべき、此あるしは、さらば此うばが、子にてやある、老たるを、をやとなし、わかきを、子とするにては、あらずや、女に五障あり、よくうばは、しれりけるや、五つのさはり、われこれを、はれたる事、ひさにさふらふ、一つには、梵王とならず、梵王は、しやば世界のあるじ、（5ウ）うばは、ひざくむあとの、あるじにてもなし、おもひもかけねば、さはりやはあらん、二つには、たいしやくとならず、たゐさくは、みそぢあまり、三のあめの上、四のあめがしたのぬし、うばはくさ引むすぶかけもしりぬる、身にあらず、なりなんとしも、おもはざれば、又さはりてふこともなし、三には、魔王とならず、ま（6オ）わうと成て、魔民をしも、したがへなむ、あなむつかし、四には、りん王とならず、りんわうは、劫初にあらざれば、ある事なし、にごれる末の世、うばのみ、くらゐうる事かは、五には、仏とならず、仏とは、まへは釈迦、のちはみろく、このあいだには、ねがへどえたる、人もなし、ほとけになれる、ときいたりて、ほとけわれを、仏になさば、（6ウ）なりてまし、なしたまはずは、ならざらまし、むつかしの、さりほつ尊者や、うるさの、ちさくぼさちや、さこそ、りうによがをかしかりけめ、上人いざずりて、あふぎをもたげて、おもてをうつ、うてどもさらに、いかるけもなし、うばは、外道の、はげたるにこそ、外道とは、有無常断、すぎやうのたねも、このみ（7オ）もなしとせざれば、無にあらず、世中のこと、つねにして、これのみ、みのりとしめなくに、有にしもあらず、むまるとまかると、此あいたに、とゞまりぬるてふ、おもはされば、などかは、常ならん、心もきえうせ、さとりもあとなしと、はからざれば、断とも、いかゞはのたまふべき、心はすむ月に似て、常にあきらかに、身は（7ウ）てれるかげのごとく、むなしくして、しば〳〵ほがらかなり、はらひさふらへども、ふりてしりぞく、ものにしもあらず、又まねくよしありとも、いかでかあらたにすゝむべき、上人おどろきて、うばは、さとれる人にこそと、たちつ、ゐつ、ぬかづく、ぬかづきぬれども、よろこびもせず、あつまりゐたる、あがため、ほ（8オ）とけに、ゐますと、みなをがむ、

雲はれてはしめていつとおもへとも月はもとより有明のそら、

上人すぎやうじやとなりて、よるも、ひるも、かゞまりつかふ、（8ウ）

玉つくり　二十

たまつくりのはにふ、いつの日の、そのころこそ、小町はきたりぬべけれと、まちをるに、いでわれゆかむ、いざすぎやうじやもゆけ、このつつみ、此ふくろ、此あぢか、みのもこそあれ、かさもこそあれ、たけのつえと、わらのくつと、つゝみには、あかつける、（9オ）やぶれたるころも、夜はのしも、よはのかぜ、しばしいけるまの、よさむをふせがん、松のちいさきすゞり、たけのみぢかきふで、こゝろのうごくかぎりの事をしるさん、ふくろには、あはのいひ、こよひまからであらば、あすのうゑをやすめん、あじかには、田のくわゐ、民つくりおさめざれは、を（9ウ）のづから、うゑて、かてにあてん、かさはやぶれけれども、みのはさけつれども、人のすてたるをひろひて、あめのときの、はだへをたすけん、日はてれども、みのは、身にかけて、ころものやぶれたるをぎなふ、つゝみはせなかにおひ、ふくろはくびにかけ、あじかは、ひだりのひぢにかけ、かさそへて、（10オ）かいひさげたり、つえは右の手に、わなゝきつきて、みつわくむ、こしひざくちの、よろほひぬるをすくふ、此あさのやぶれたるころも、むかしのからあや、こまにしき、道のほとりの松のかげ、もゝしきの玉のひさし、こがねのゐらか、みちしばのなびくにたまりたるちり、雲の上のしたん（10ウ）の床、からぬいものゝしとね、月はひがしにのぼれども、人をまつおもひもなく、日はにしにかたふけども、いのちのせまるうれへもなし、まへにたち、うしろにたゝずむ、しづのめ、こゑをあげて、おひおとろふる、見にくきを、あざけれども、はぢしらふなさけ、むねのいつこよりかをこらん、みぎりにめぐり、（11オ）ひだりにかこむわらはべ、手をうちて、ものこふいやしきをわらゑども、いかりぬるこゝろ、おもひのはしにもさはがんとせず、道のちまたのふめるにまかせ、たどれるあしのあよむにしたがひ、ゆく〳〵に、するがのくにいたりぬ、ふじのたかねを見あげければ、みねは絵にかきいだせる、たまきのかし（11ウ）ら、そらにたゝゆるうみにひたり、すがたまとかに、うつくしきが、雪にやある、ふににやある、ましろにねりくだして、ふもとはするがのくにを、つくしあまりて、いづのくにゝまたがり、とをくみをやふみつらん、かゝる山の、一いろばかりの、ことみねの、さけわかれたる、くまだになき、山のあしは、いづの（12オ）うみの、なみにあらひ、うきしまがはらの水にすゝぎて、あまぐもをすそのゝは

らの、おばながすゑにやどし、それより上には、なるかみの、こゑだにたえてのぼらぬは、もろこし、なをそのにしの、からくににも、あるてふためしこそなけれ、

人ならぬふしのたかねもおひ（12ウ）てしろしとしのつもりのゆきのかきりは、

いざ我かみのしろさにくらべ見ん、しらがのいと、かきさぐるに、いつかはをちはてて、ところ〳〵に、かつのこれる、むすぼほれて、をどろのごとく、いとふさびはて、きばみかれて、雪のいろさへ、むかしのおひなり、（13オ）

むはたまのそのうるはよりしりけれはしらかやもとのかみにはあるらん、

江によりて、かゞみ見れは、目はをち入て、かれゐのごとく、ははぬけて、くちびる、くちにまくれ、なをすぼみよりて、しめたる、ふくろにことならず、ほうは、あくにまとはりて、ふりて、やぶれし、ほどきのそこ（13ウ）ににたり、しもをくよもぎ、たれかわがかしらにうゑけん、たつのみやこや、わがかほにうつりぬらん、やゑなみしきたゝむ、あづさのゆみさへ、こしをうかれて、むねはまへに、こしはうしろに、ひざはさきへ、すねはあとへ、みつわくむとこそ、これをいふなれ、かゝるすがたを、ありし雲の（14オ）上の、人〳〵に見せまひらせて、むかしのたまづさ、いまたびてよと、そでにすがり、こしにまとはれて、こひせたげん、かへりなんいさ、かへりなんいさ、すがたの花、みなちりしかば、こゝろのはなも、ちりつきてのこらず、身のいろうせて、なかりければ、おもひの色もたえてなし、むかしはものゝ（14ウ）ことはりをおもへども、またものありて、心にそふ、そひてこゝろをこばめぬれば、をのづからことはりくらみて、ことにまよふ、今は事もものも、こゝろにそはで、心ひとりありて、ことはりをのづから、ことはりに見えて、まがはず、ふじを見れば、たゞきはなく、たかく、いときはめて、うるはしきに、と（15オ）し〳〵のゆきつもりはてゝ、をのづから、しろたえなり、此山の、たかゝれば、たかきけもえて、くえて、けふりとたてるのみ、かくのみ見えて、おもひするこころのもえ、こひのけふりの、くゆるなど、そふものこそなけれ、おひのたのしひ、われにありて、人さらにしらずかし、一ときをふるに、ちとせのたの（15ウ）しひ、千とせのたのしひ、又よろづ世、

老らくのくるを待えしさいはいそこのたのしみをわかものとなす、

おひのあしの、かゞまり、ふるへる、いくらのほど、ゆくとはなけれど、月ゆき、としゆきぬるまゝに、これなん、むさし野なりけり、此野と見しより、いくかゆくらん、日かずよむ、おもほえず、こ（16オ）ここそ、野なかなるらめ、くにはなれたる、わだづみの、おきつしほぢのべ、しらぬこゝちこそすれ、日のいづるもて、かたしりて、ひんがしにむかひ、みんなみを見、きたをのぞむ、ちさとのほか、やちさとの外にあしびきのすがたも見えず、にしをかへり見すれば、もゝえの雲のあなた、ちゑのかすみ（16ウ）のほかに、かすかに見ゆるは、白妙の雪を、ちひろ、又千ひろ、つみあけたるのみあり、こはなになる雪ぞととへば、行かふ人、ゆきがてに、しほれて、おひのまなじり、見かへる事の、さだかならぬや、いたはし、ふじのねならで、何のみ雪のそらがちて、のぼりなん、ふくろをたゝき、ふるへる、うちあげて、うた（17オ）うたふ、

むさし野は　ちさとの外の　ちさとにも　と山をく山の
かけもなし　あかねさし　いつるには　日そひかしなる
むは玉の　よるには月や　にしならん　さらてはこゝに
きたもはた　みなみもさらに　しらぬまてに　ふみまよふ
のゝはてなきに　ふしのねの　見えぬるや　みやこのかた
の　こしかたの（17ウ）　かたみなりけり　行くれて　む
すひてまける　くさよりも　いてゝは草に　入つきも　の
はらのうちに　みちかゝる　こし人ことに　とひみはや
このむさしのゝ　野への心を

返し歌

むさし野は月のいつへき山もなしくさよりいてて草にこそ
いれ、

あよむにつかれをこれば、いづ（18オ）ことはなくふす、ぬるにこゝろきたれば、いつとはなくゆく、ひるゆくにもかぎらねば、よるぬるにもかぎらず、よるともなく、ひるともなく、たゞこゝろのさそふに、うちまかせたり、月をとことしなせば、しろかねの世かひにふして、ゆめも人の世中の、うきふしをむすばず、露をまくにまけば、てれるたまのうてなに（18ウ）いねて、めさめて見るも、じやうどのかざりに、まどろみを、よせざるはなし、あくれば又うかる、はぎすり、をみなへし、かさねきるも、花のころも、ふむものは、花のむしろ、くものの りもの、かぜのおもとびと、ひさかたのあめは、わがために、九つのともしひをかゝげ、あらかねのつちは、われにしたがひて（19オ）五つのもふけをなす、たびのものうきは、たがこゝ

ろにかつどひけん、うれへてふ、われさらにしらず、ゆきつくして、ゐねぬるも、ゆめきはまりて、さめぬるも、みなやすく、こゝろよし、なをうたひ〳〵てゆく、

あつまちは　はてしもなし　山にくれ　のへにあけて（19ウ）　ゆきぬれは　みちのくま〳〵　おもしろや　かせにをくられ　月にむかへられ

返し歌

風はをくり月はむかへて東路のかきりなきはてに我をいさなふ、（20オ）

たまつくり物語　十五止　（題簽）

ゆめのあけつらひ　二十一

こむらさき、こよなふさきちる、こ萩をしなび、たびねしぬるや、しら雲の、たちくる人は、もゝしきの花のえんづ、まことのをと、しれりける人にざりけり、此人見て、おどろきて、君はありつる、なひしのかみ、うなげしそれならずや、いたくおひ、いたうを（1オ）とろへて、道のしばふのやさしきに、つかれはてぬる、たが人やりのみちにや、世中のおなしこゝろにて、きみの御けしきとりて、御子もいできさせおはしまして、あまつひつきつぎたまはゝ、おほきさいのみや、さらずは、女御かうゐの、み田もありなん、きさいのみやにて、かくしも、おひはておはして、はもをちて（1ウ）なかりせば、中宮の、おほんちぶさこそあらめ、よし人のめとなるとも、みだいどころ、きたの方にてこそ、いまそかるべけれ、こはいかなる、なれるはてのありさまぞや、さこそをもなく、いかばかりくやしくやと、とひいたはる、うれしくもあひ見つるかな、君がさとき心、いざわらはと、ともなひませ、何のをも（2オ）なくさふらふべき、きさいのみやの、いみじき御くらゐ、それもおひのくるしみ、ひとりこそうれへ給へ、もものおもと人、たれかかはりたてまつる、さらぬつゐのみゆきには、たゞひとりこそゆきおはしませ、ちゞのつかさめ、したがひたてまつるはたそ、君は人のをはりぬるをのみ見て、人のよ（2ウ）のつねをしもしりまさず、わが身みにして、なにがしの人のかぞいろにてこそ、をはりぬべけれ、わらはも人のよのつね、すでにしりはべりつ、雲の上のあさなゆふな、をりゐのさとの、むろのうち、つねてふことはしりさふらひしが、かはれるのちは、又いまにてこそさふらへ、つねてふこと（3オ）しります、などしもし

かならん、人の身のとりつとめぬる、のりにたがはぬ、われやはそれをいふ、君が心しめいひて、人のつねの上にしも、とゞまらなくに、かくかはれることの、はやきにこそ、かはれりけるためしは、わらはのみかは、むかしの世、いくそばくぞ、ひぢりにもあり、かしこきにもあ（3ウ）り、むかしの人のかはれることにあひつる、いかにおなじためしならん、世はこぞりて、みなにごれり、われひとりすみにたり、げにさる事こそさふらへ、われは世のにごりけるをも見ず、我すみぬるをもしらず、にごりけるをし見れば、にくみこゝろ、いとうるさく、すみにけるをおもへ（4オ）ば、これてふこゝろいやむつかし、心こそとこなれ、身はとこならず、こゝろこそたのしめ、身はたのしまず、こゝろの位は、たかきにまかするを、身のくらゐは、人のためにうばはれぬる、こゝろのとみは、きよきまに〳〵、とき〳〵にまさり、身のとみは、むさぼらざれば、日〳〵にへり行、あしは一まをもゆか（4ウ）ねども、心はちさとを行かふ、目はさうじをもこさなくに、こゝろは、こま、もろこしを見て、山にあそび、水をもてあそぶ、君がこゝろ、何のくま〳〵をか見ます、まづろさんといひしは、むらさきのけふりのたちのぼりぬるは、かうろほうならん、天の河をちくめると、あやまたれたるは、はくふの（5オ）瀧とぞいふ、つるぎたてならへたるみね、五らうのみね、雲にかけたる、これはえゝる人のわたりし、こけひのはしならん、とうていとは、しやうせうのふたつのながれ、入日をあらひ、よるのあめをいてもて、うみに入、天門てふ、ひだりみぎりのたかきみね、そばだちさけて、はるかなる、江をさし（5ウ）はさみたるは、人のたてたるかどのごとし、なみのとびて、をりさがる、ひさかたのあめに、をしひらきけり、いくらともなき、いづる舟、入ふね、ゆくなる、かへるなる、とまりぬる、ふなよそひする、此水、山をうしとらかけて、をしやらひて、七そぢあまり、ふたみねの、にしきほしやう、引たる、うみを、（6オ）にしにいだきいれ、みんなみにひらきのべ、ひんがしにはきいだす、あひそめいたせるは、くもをそめ、空をあらふなる、何かゝるのみならん、こゝろみに心をして、あめのみかどの、きさいのみやにそなへつれば、しもつかたには、あまつをとめの、ものもふすにつかれ、かみつかたには、梵王のみめのそねましかり、よしや（6ウ）七くち仏母となれとて、仏のはゝとなしければ、三世のほとけみなわがまへに、ひざまづき給ふ、それもなをまだ、女のけはなれざりけり、すてて、をとことなれば、は

やをとことなり、地ごくとかやきゝし、をそろしきかぎりになしぬれば、くるしみすなはち身をこそせめぬれ、がきてふ鬼（7オ）になせば、うへかはくことゝみなりけり、とりけだもの、かみほとけ、なすにしたがひて、なりもて、さはりきしる事はさふらはず、花となせば花になりて、ちえひとへ、あけむらさき、このいろ山をにしきにかへし、さとをくもにうづましぬる、をろかなるをばいやまどはし、かしこかるをばさとりあたれと、おどろかす、（7ウ）にほひかほり、その香、はなぶさをうかれて、かすみにとろけ、風にのりて、いろごのみの、そでにとゞまりぬなり、月になせば、月となり、つりばりをまげ、弓をはり、ますかゞみかけ、よはにみがき、ひるにさび、まどへるをばあはれにいれ、さとれるをば、おのが心をみせなどして、山にかたふき、くもにに（8オ）ほひて、歌人のおもひとなる、あめかせ、つゆ霜、又そらとなせば、そらとなる、ほとりもなく、はてもなく、あめもつちも、わがはらの中のちり、月も日も、むねのあひだを、めぐるひかり、なりけり、かへりて人となせば、君もあり、人もあり、おやもあり、子もあり、心となせば、いつくしみ（8ウ）も、うやまひも、はぢ、にくみ、これなる、あらざる、みなしたがひ、さふらふ、何の人の、よのつねをたどり、さぐりさふらはん、何のきさいのみやをか、うらやみたてまつりさふらふべき、君はきみが、あめのさだめにまかせよ、われはわがさだめならまし、

とにかくにかけをはくもにまかす（9オ）へし見るはこゝろよそらにすむ月（9ウ）

一むらすゝき　二十二

たびごろも、はる〳〵とさそらひきて、みちのおくの、こゝもとまでいたりぬ、人にこの野をとへば、たまつくりといふ、しげれるくさの草むら、きり〳〵す、まつむし、やどして、夕ぐれのかぜのをと、つまとふしかのこゑ、あはれをのみあらそふなる、さとふき（10オ）くるかぜの、をとの聞なれたるこゑして、歌にたる、又ながむるにたり、一たびきくに、さだかならず、二たびみたびきけは、

秋風のふくにつけてもあなめ〳〵、

きゝしにたれど、此野べにすむべしとはおもほへず、家もあらなくに、又かげもなし、なをたゝずみをりて、（10ウ）きくものから、

秋かせのふくにつけてもあなめ〳〵

こゑにしたがひたづねゆけば、すゝき一むら、なびきたれて、しのにをく夕露、たまゆらに、みぎりひだりにちる、やすらひきくに、此すゝきにあたれる風のをとの、よむにぞありける、あやしや、いかなるゆへぞ、た（11オ）ちよりて、うつむき見れば、かつ露にされたる、どくろに、すゝきつらぬかり、をひたるなり、おほかたこゑしれる、あはれは、やるかたこそなけれ、どくろをとりもて、のきてきけば、たゞあき風さゝ、又もとのごと、つらぬきもて、のきてきけば、

あき風のふくにつけてもあ（11ウ）なめ〳〵、

をとのしたより、をひつひで句をつぐ、

をのとはいはしすゝきをひたり、

此小野小町は、よをたえにたる、うるはしき人、又やまと歌に、たえたるのみか、みゝさとく、心さとく、たぐひしもなき、あやしき女なり、此野べまで、いかにひとりさそらひき（12オ）て、夕べの露、あしたの霜とはなりにけん、見るになみだのを、みなうるほし、おもへば玉のを、この夜はにたつ、子もあり、むまごも有、身をかくして、ひとりさそらふ、ともあれども、しられす、よしみあれども、かたらはず、げに人のあひだに、とゞまらず、世のあいだをいて、をへたる人ならし、雲の上の、お（12ウ）ほんあそびには、からにしきしくうてならでは、ふむかたもなく、野のほとりの、わたくしのたはふれにも、玉かけのくるまにあらざれば、あよむみちしもなし、いつならひ、いかゞゆきて、ちさとなをちさとの、此ちさとの外の、野辺にはきましけん、とにかくに、いはゞなを、おほよその事ならん、石をき（13オ）り、どくろをおさめて、去をなみたにうるほしもて、ひきかけぬ、さとのをさの、こといらへぬべき、いでこさせてとへば、ことなる女の、もゝとせなりける、のべにねまりをりける、わがから、うづまざれ、やまからす、きつねのはむに、まかせよといひて、

えにをふるよしあしの葉をふ（13ウ）みしたき行かたをなみ身まかりそする、

あやしき、もゝとせなり、うごかしたてまつりそ、百あよみのほか、しめいひて、けふまてに、入くる人なし、しか〳〵、なをとぶらひ来て見れば、あさきり、ちくさのいろをわたりて、しほみたぬうみ、にしきをひたし、夕あらし、おばなをふるひて、水な（14オ）がれぬなみ、もゝくさの花の、ぬいものをあらふ、かぜも月も、みなこゝもとにあつまり、歌よみのあと、ならびにこのわたりにとゞまる、（14ウ）

〔前誌翻刻の訂正〕

頁段行	誤	正
243上18	事つけ	書つけ
245下17	つか	ほか
254下12	ほに	つに
259上17	教道	教へ
264上10	ねに	ねよ
268上8	する	すな
268上11	うれ	うる

校異

一、本校異編に使用した底本・対校伝本は次の諸本である。

	略称
底本	
大東急記念文庫蔵写本一五冊	大
校本	
実践女子大学図書館蔵写本一〇冊	実
陽明文庫蔵写本一五冊	陽
筑波大学図書館蔵写本一〇冊	筑
（第二・四・五・十・十三冊は欠）	

一、異同箇所は、底本の第何冊、第何丁表裏、異同部分の数語を掲出し、その下に対校本文とその伝本の略称を示した。

一、前稿例言に記したように、底本に補入箇所が存在し、翻刻では本行に組み入れた。よって、底本であっても校異として補入箇所を掲出した。

一、底本・校本の補入箇所は、（　）に入れて示した。
一、校異掲出に当って、漢字と仮名、仮名遣い、読点、濁点の異同は省略した。また、題簽上の文字、巻名目次上の数字は校異の対象外とした。

第一冊

2オ　夢の内のおとろへ此巻脱篇―第十六脱篇**実**
2ウ　一むらすゝき―一むらすゝき計二十二篇**実**
3オ　そとをり姫―そとをり姫**実**
3ウ　たえぬるかは―たたぬるかは**陽**
8オ　すむなる―すむなるか**筑**
12オ　えらぶなん―えらぶ(なん)**陽**
14オ　もとむるは―もとむる(は)**実**

第二冊

2ウ　いまの世の人―(いまの)世の人**大実**世の人**陽**

第三冊

2オ　にくきにせゑ―くきにせゑ**陽**
4ウ　たのめしものから―た(の)めしものから**筑**
5ウ　しりはをくとも―しもはをくとも**実陽**
9ウ　えもき―よもき**実**えもぎ**筑**
10オ　身まかり―身まかり**陽**
12オ　たゝなるふで―たえなるふで**実陽筑**
12ウ　あれも見て―あれとも見て**筑**
13オ　うばそくなる―うばそるなる**実**
20オ　夢のあひた―夢のあいただ**筑**
20オ　このこがね―この(こ)がね**大**
20ウ　などひとは―(など)ひとは**大**

第四冊

1オ　ばかりのほど―ばかり(の)ほど**陽**
2オ　おひのうれへの―おひのうれへ**陽**
2オ　うれへましき―ううれへまじき**陽**
3ウ　つとめなるべけれ―つとめなるべきけれ**陽**
4オ　ゆめこゝろも―ゆめこゝろの**実陽**
6ウ　四りんの―四りん(の)**実**
7ウ　かたちと―かたち**陽**

8オ　たみも―たみ(も)**陽**
10ウ　あめがした―あめ(が)した**実**
11オ　よみてたてまつり―よみたてまつり**実**
11ウ　つちもくたけて―つち(も)くたけて**陽**

第五冊

2オ　かくるゝきぬ―かゝるゝきぬ**実**
2ウ　さへぎり―(さへ)ぎり**陽**
3ウ　まつにくるしき―まつ(に)くるしき**大**
3ウ　うちさしめ―うちさゝめ**陽**
7オ　とふとげなる―とふ(と)げなる**大**
12ウ　ふるくさかぎり―ふるくきかぎり**陽**
17オ　はつかあまり―はつ(か)あまり**大**
17オ　身をくだき―身(を)くだき**陽**
18ウ　心のひかり―心(の)ひかり**陽**
19オ　ありけりとは―あり(けり)とは**大**
21ウ　かの師のせい―かの師の説**実陽**
22オ　めでずて―めでず(て)**陽**
22ウ　やつのせつ―やつのせつ(を見そなはし)**実**
22ウ　しりつくして―(しり)つくして**実**つくして**陽**
23オ　つきなるはかしこき―つきなる(は)かしこき**大**
23ウ　らうし―孝子**陽**
24ウ　ぼさつ―ぼさつ(ち)**実**
25ウ　ほとけや―ほとけのや**陽**

第六冊

1ウ　こゝろしてこそ―こゝろしてこそ(さかせけめ)**実**
2オ　さること―さること(にて)**実**
2ウ　えならぬすがた―(えならぬ)すがた**筑**
4オ　くせごとするなる―くせごとする(なる)**陽**
5ウ　はべりては―はべりて(は)**陽**
9ウ　一目―一日**陽**
10ウ　いさめも―いさめとも**陽**
13オ　こえにこえぬる―ここにこえぬる**実**
14オ　ひめごまの―ひめごまゝの**筑**
17ウ　内へまひりて―内へまひり(て)**陽**
18オ　そらにならはて―そらになくはて**陽**
19オ　おもふこゝろの―おもふこゝろ(の)**陽**

19ウ　もたらぬ物ーもたえぬ物陽もたえぬ物筑
20ウ　ひぢりにもーちりにも筑

第七冊

1オ　百夜かよひませーー(百夜かよひませ)筑
1オ　百夜にならばーー百夜(に)ならば大
1ウ　うちかづきみのかさにあて月のよは扇子うちかざしてーうち(かづきみのかさにあて月の夜はあふぎうち)かざして実
2オ　ふしにけるーふし(に)ける陽
2ウ　ばかしころしーー(ば)かしころし陽
3ウ　わうむがへしーあうむがへし実
4オ　みのりのたむけーみのり(の)たむけ大陽
4ウ　わがくにのーにわがくにの陽わがくに(の)筑
5オ　たまもーたまも陽
5オ　あるさいしやうーー何かしのさいしやう実
5オ　をるにもーをる(に)も陽
6ウ　身のけーー身の(け)実
8ウ　さまには—さまには陽

第八冊

1オ　かききりーかき(き)り筑
2ウ　みがくがーみがく(が)陽
3オ　くねればーく(ね)れば筑
4ウ　ふけらんーふけゝん陽
7ウ　ゆくくもーゆく(く)も筑

第九冊

4オ　世の人のー世(の)人の大陽
4オ　もてするはーもてするは陽
4ウ　給ひぬることー給ひぬ(る)こと大
6オ　こえさせずーこえ(さ)せず筑
6ウ　ひきいれぬるーひきいれぬ(る)大
9オ　はたものーはたも(の)の陽
9オ　なさせそーな(さ)せそ陽
9ウ　ちぶささがりーちぶ(さ)さがり筑
9ウ　おりぬふわさのーおりぬふ(わ)さの筑

第十冊

2ウ しろかね―しろかねに陽
9ウ 七えだ―六えた実陽
10ウ よくかの―よゝかの陽
11ウ あめの上―(あ)めの上陽
13オ みそちばかり―み(そ)ぢばかり陽
14オ しきたてたる―しき(た)てたる大
14オ かつらの木―かつらの(木)陽

第十一冊

2オ 額格こそ―格こそ実陽
2オ たちさはげば―たちさ(は)げば陽
2ウ 香ににほふ―香にほふ陽
3オ めづらかなる―めつらかなるにも実
4オ くには―くに(は)陽
5ウ おさむる神なり―おさむる神(なり)大
6ウ いざなぎの―いざなぎ(の)大
8オ うれへます―うれます実

第十二冊

1オ さそらひし―さそ(ら)ひし陽
1オ すぎやしけん―すぎ(や)しけん大
2オ 月のすがた―月(の)すがた陽
6オ たてまつりなん―たてまつ(り)なん実
6ウ ならせたまひて―ならせたまひ(て)大
7オ ちのこゝろ―じりのこゝろ実
7オ 人のなと―(人)のなと実
9オ 二丈―二(丈)大
9オ かほりて―かほり(て)筑
10ウ りますは―りまするは筑
11オ しそきて―し(り)ぞきて実

第十三冊

1オ かくこそ〳〵と―かくこそかくこそ(と)実
3オ み子―みな実
4オ おしへと―おしへも陽
4オ わかれの―わかれ(の)大
4オ つかれ―つか(れ)大陽
9オ ひとりが―ひとり(が)大

10オ　ひぢり―ひちり（じ）**実**
11ウ　その人にて―その人に（て）**大**
12ウ　さ返し―御返し**陽**

第十四冊

1ウ　たえたまふ―たてたまふ**実**
1ウ　たてたてまつれ―（たて）たてまつれ**筑**
2ウ　ちりかきし―ちりかさし（き）**筑**
2ウ　くさまくら―（くさ）まくら**陽**
4オ　はなれゆく―しなれゆく（は）**筑**
5ウ　老たるを―老たる（を）**大**
5ウ　わかきを―わかき（を）**筑**
5ウ　するにては―するに（て）は**陽**
7オ　いざずりて―さざずりて（い）**筑**
7オ　うてども―うてども（く）**陽**
9オ　小町は―小町**実**
11オ　いつこよりか―いつこより（か）**大**
11ウ　見あげければ―見あげ（け）れば**筑**
17オ　ならぬや―ならぬやぬや（ぬ）**筑**
18オ　みちかゝる―みちかくる**実陽筑**
19ウ　はてしも―はて（し）も**陽**

第十五冊

2オ　なかりせば―なかりせせば（せ）**筑**
4オ　すみにける―すみ（に）ける**筑**
8オ　いろごのみの―いろこのみ（の）**陽**
14オ　人なし―人なりし**筑**

解　題

本解題は、翻刻・校異に取り上げた『玉造物語』諸伝本の書誌解題を中心に記す。紙幅並びに内容の都合上、『玉造物語』の注釈的・作品論的考察は別稿に譲りたい。

使用した四伝本の書誌は以下の通りである。

大東急記念文庫蔵写本

番号　四三―五―一四

形態　袋綴

冊数　十五冊　ただし第十四冊と第十五冊は仮合綴されており表面上は一四冊

寸法　竪二五・七糎　横一八・八糎

表紙　横縞刷毛目表紙

題簽　中央上　ただし第七冊、第十冊、第十三冊は欠　「たまつくり物語一（～十五止）」と墨書

料紙　斐紙

行数　八行

字高　一六・九糎

墨付　第一冊一五丁、第二冊一四丁、第三冊二四丁、第四冊一三丁、第五冊二九丁、第六冊二一丁、第七冊一二丁、第八冊一四丁、第九冊一〇丁、第十冊一八丁、第十一冊九丁、第十二冊一一丁、第十三冊一三丁、第十四冊二〇丁、第十五冊一四丁

奥書　ナシ

時代　〔江戸時代〕写

朱入　読点・濁点は朱

印記　「和学講談所」「森氏開萬／冊府之記」

実践女子大学図書館蔵写本

番号　常磐松文庫

形態　袋綴

冊数　十冊

寸法　竪二五・三糎　横一八・四糎

表紙　鶯色地布目表紙

題簽　中央上　「玉つくり物語一之二（～二十一之二十二）」と墨書

料紙　斐紙

行数　八行
字高　一六・九糎
墨付　第一冊二七丁、第二冊三一丁、第三冊四七丁、第四冊二一丁、第五冊一一丁、第六冊二五丁、第七冊四一丁、第八冊一五丁、第九冊二〇丁、第十冊一四丁
奥書　ナシ
時代　〔江戸時代〕写
朱入　読点・濁点は朱
印記　「実践女子大学図書館印」
備考　各冊の所収巻は、底本大東急記念文庫蔵本の目録（前誌二三四頁）の巻数で示すと次の通り。第一冊巻一・二、第二冊巻三・四、第三冊巻五・六、第四冊巻七・八、第五冊巻九・十、第六冊巻十一・十二、第七冊巻十三・十四・十五、第八冊巻十七・十八、第九冊巻十九・二十、第十冊巻二十一・二十二

陽明文庫蔵写本

番号　タ九七
形態　袋綴
冊数　十五冊
寸法　竪二八・四糎　横二〇・五糎
表紙　横縞刷毛目表紙
題簽　中央上　「玉つくり物語」と墨書
料紙　斐紙
行数　八行
字高　一八・〇糎
墨付　第一冊一九丁、第二冊一六丁、第三冊二七丁、第四冊一八丁、第五冊三六丁、第六冊二五丁、第七冊一四丁、第八冊一六丁、第九冊一二丁、第十冊二三丁、第十一冊一〇丁、第十二冊一三丁、第十三冊一五丁、第十四冊二四丁、第十五冊一七丁
奥書　ナシ
時代　〔江戸時代〕写
朱入　読点・濁点は朱
印記　ナシ
備考　各冊の所収巻は底本と同じである。

筑波大学図書館蔵写本

番号　ル一二〇・二二二

形態　袋綴

冊数　十冊　第二・四・五・十・十三冊は欠

寸法　竪二五・九糎　横一八・九糎

表紙　農紺色表紙

題簽　欠

料紙　斐紙

行数　八行

字高　一七・八糎

墨付　第一冊二〇丁、第三冊二八丁、第六冊一四丁、第七冊一三丁、第八冊一六丁、第九冊一一丁、第十一冊一〇丁、第十二冊一三丁、第十四冊二四丁、第十五冊一七丁

奥書　ナシ

時代　〔江戸時代〕写

朱入　読点・濁点は朱

印記　「東京文理科大学附属図書館図書之印」

備考　各冊の所収巻は底本と同じである。

『国書総目録』によれば、以上の諸伝本以外に京都大学本が記されているが、これは一時期京都大学に寄託されていた陽明文庫本が誤まって記されたものとのことである。また、旧彰考館文庫本として、四冊本と三冊本の二部も著録されているが、戦災により焼失している。

これら以外にも、某所に新写本が存在しているが、それは既出の伝本の影写本である。いずれにしても、管見の範囲では、上記四伝本を対象とせざるを得ない。

校異あるいは書誌の比較から明らかなように、前記四伝本は密接な関係にある。しかも、変体仮名の字母まで一致している場合も多い。また、校異として表われたものも、その字母をみると近似した字の間違いが多いことに気付く。詳述はしないが、この四伝本は、ほぼ同系統の写しとみてよいであろう。

〔付記〕

本稿を作成するに当り、貴重な御蔵書の閲覧並びに、翻刻・校異掲出の御許可を賜わった大東急記念文庫・実践女子大学図書館・陽明文庫・筑波大学図書館に厚く御礼申し上げます。